

自分を見つめ、よりよい生き方についての考えを深める道徳学習指導に関する開発的研究

永田 佑 [鹿児島大学教育学部附属小学校]

榊 将和 [鹿児島大学教育学部附属小学校]

Developmental research on ethics education involving introspection and deepening the idea of a better way of life

NAGATA Yu and SAKAKI Nobukazu

キーワード：自分を見つめる、よりよい生き方についての考えを深める、問い

1. 研究の背景

人間は、本来、人間としてよりよく生きたいという願いをもっており、この願いの実現を目指して生きようとするところに道徳が成り立つ。道徳教育とは、人間が本来もっているこのような願いやよりよい生き方を求め実践する人間の育成を目指し、その基盤となる道徳性を養う活動である。道徳教育は、社会の変化に対応しその形成者として生きていくことができる人間を育成する上で重要な役割をもっており、今後、グローバル化が進展する中で様々な課題に対応していくためにも、大きな役割を果たす必要がある。そして、その要となるのが、「特別の教科 道徳」（以下「道徳科」という。）である。

これまで、子どもたちの道徳性を育むために道徳科授業の充実・改善をしながら、道徳科の特質に応じた見方・考え方を働かせた深い学びを展開してきた。そして、ねらいとする道徳的価値観について、多様な価値観があることを基に、自分なりの道徳的価値観を再構成していこうとする姿が見られた一方で、子どもによっては自分事として考えることができず、十分に道徳的価値観を再構成することができなかったり、自分の生き方についての考えを深められなかったりする姿が見られた。

この課題の要因として、自分の価値観に固執してしまい、友達価値観を受容したり、自分の生活とつなげて考えたりすることができていなかったことが挙げられる。それは、子どもにとって、「よりよく生きるためには、どんな考えが必要なのか。」「自分だったら、どうするだろうか。」といった、自分の生き方に関わるような問いの問い方が十分でなかったからであると考えられる。

そこで、子どもたちが「どのように生きるべきか。」という問いをもち、より主体的に自分を見つめ、他者と関わり合いながら自分の生き方についての考えを深めていくために、道徳科授業を充実・改善していく必要があると考えた。そして、そのことが、子どもたちが「自分はどうか。」「何を大切に生きるのか。」といったよりよい自分の生き方についての考えを深めていくことにつながると考えた。

2. 研究の方向

これらのことから、これからの道徳科授業においては、これまで以上に子どもたちに、これまでの自分を見つめたり、他者と関わったりしながら多様な考えに触れ、自分にとって大切にしたい考えやよりよい生き方につながる考えなどを見いだし、自分の生き方についての考えを深めさせる必要がある。そこで、道徳科授業において目指す子どもの姿を、「自分を見つめ、よりよい自分の生き方についての考えを深める子ども」と設定した。

よりよい自分の生き方についての考えを深めるためには、これまでの自分を見つめることによって考えていきたい問いをもつことが必要となる。そして、他者との関わりの中で多様な価値観があることに気付き、それらを受容しながら、自分の生活とつなげて粘り強く考えることによって道徳的価値観を再構成していく。さらに、再構成した道徳的価値観を基に自分の生活とつなげて考えることによって、よりよい自分の生き方についての考えを深めていくことができると考える。つまり、子どもが、よりよい自分の生き方についての考えを深めるためには、個人内や集団での学び合いにおいて、一つの考えだけでなく、様々な考えを基に、目的に対して自分なりの考えを見い出すことが必要となる。そうして形成された道徳的価値観を基盤として、一人一人が自分の生き方についての考えを深めていくことができるようにすることが大切である。

このような子どもの姿を目指すためには、子どもたちが、自分を見つめたり、自分に問いかけたりしながら、よりよい生き方について粘り強く考えることで、自分の生き方についての考えを深め、よりよい生き方を目指していこうとする意欲・態度を高めていくことが大切である。また、道徳科で育む資質・能力は道徳性であると示されているが、これは道徳科の学習を通して育まれるものであるため(図1)、自分を見つめ、よりよい生き方についての考えを深める道徳科の学習において育む資質・能力を表1のように整理した。

そこで、本研究では、子どもたちが自分を見つめ、「どのように生きるべきか。」という問いをもち、よりよい自分の生き方についての考えを深めることができるようにするために、これまでの研究を踏まえ、授業レベルでさらに具体化していく。

表1 自分を見つめ、よりよい生き方についての考えを深める道徳科で育む資質・能力

| 知識及び技能 | 思考力・判断力・表現力等 | 学びに向かう力・人間性等 |
|-------------------------|--|--|
| 道徳的価値を自分の生活との関わりで理解すること | 自分を見つめ、他者との関わりの中で、多様な価値観を受容し、自らの体験場面での内面と関係付けて類推しながら考え、表現しようとする力 | 自分自身のもつ心の葛藤を乗り越えたり、道徳的価値の理解を深めたりしながら、主体的に、粘り強くよりよい生き方を目指していこうとする態度 |

3. 研究の内容

3.1. 自分を見つめ、よりよい生き方についての考えを深める道徳科授業とは

自分を見つめるとは、子どもが問題意識をもって道徳的な課題を自分との関わりで考え、道徳的

価値を自分のこととして感じたり考えたりすることである。また、そのことによって、「どのように生きるべきか。」という問いをもつことであると考え。つまり、図3のように、今の自分をもう一人の自分が見つめることによって、これまでの生活や経験と、それに伴う考え方や感じ方を想起したり、今の自分の在り方を見つめたりして、よりよい生き方やよりよく生きたいという思いや願いとの矛盾や疑問から自分なりに考えていきたい問いをもつことである。

よりよい生き方についての考えを深めるためには、自分を見つめたことによって生まれた問いを基に、多様な価値観の存在を前提にして、他者と対話しながら考え、道徳的価値を含んだ事象や自分の体験などを通して、そのよさや意義、困難さ、多様などを理解することが必要である。

つまり、子どもがこれまでの自分の経験やそのときの感じ方、考え方と照らし合わせながら考えていきたい問いをもち、その問いを解決するために、学び合う中で他者の多様な価値観に触れることによって様々な視点から物事を考え、自分の大切にしたい考えとして道徳的価値観を再構成していくことが必要である。そうして形成された道徳的価値観を基にして、「自分はこれからどう生きるのか。」「何を大切に生きていくのか。」といった自分の生き方についての考えを深めていくことができる。と考える。

以上を踏まえて、自分を見つめ、よりよい生き方についての考えを深める道徳科授業を、「これまでの自分を見つめて考えていきたい問いをもち、互いの多様な価値観を受容したり、自分の生活とつなげて考えたりしながら道徳的価値観を再構成し、よりよい自分の生き方についての考えを深める授業」と捉えた。

このような授業を展開するためには、子どもがこれまでの自分を見つめ、考えていきたい問いをもたせる働きかけを具体化する必要があると考える。また、他者との関わりの中で自分なりに大切にしたい考えを見だし、その考えを基に、自分の生き方とつなげて考えていくためには、子どもがこれまでの生活における様々な関わりを通してもっている価値観が、授業における個人内や集団での学び合いを通して、どのように道徳的価値観として再構成していくのかを明らかにする必要がある。さらに、再構成した道徳的価値観を基にして、よりよい自分の生き方についての考えを深めていくために、子ども自身が自分の大切にしたい考えを明らかにして、これからの自分の生き方とつなげて考えていける教師の働きかけの具体化が必要であると考え。



図1 子どもが、自分を見つめる様相

3.2. 自分を見つめ、よりよい生き方についての考えを深める授業創造の基本的な考え方

自分を見つめ、よりよい生き方についての考えを深める道徳科授業に迫るためには、考えていきたい問いを基に、子どもが表出したもともともっている価値観を、自分なりの道徳的価値観として再構成し、よりよい自分の生き方についての考えにつなげていく必要がある。その際、他者の多様な価値観に触れながら「思考力・判断力・表現力等」や「学びに向かう力・人間性等」と関連し合っ、よりよい自分の生き方についての考えにつなげていく。そこで、自分を見つめ、よりよい生き方についての考えを深めるために必要な道徳的価値観への変容を表2のように整理した。また、この過程において、子どもたちは、道徳科における見方・考え方を働かせながら、よりよい生き方についての考えを深めている。

子どもたちは、考えていきたい問いに対して、これまでの経験や教材を通して、自分の価値観を表出する。そして、集団や個人内での学びを通して他者の価値観を受容したり自分のこれまでの生活とつなげて考えたりすることを繰り返しながら、道徳的諸価値の理解を深めていく。それらを通して自分の大切にしたい考えとして道徳的価値観を再構成する。この再構成した道徳的価値観を基に、自分の生活とつなげて考えることによって、よりよい自分の生き方についての考えを深めることにつながると考える。

子どもたちが自分を見つめ、よりよい生き方についての考えを深める過程を、具体例を基に述べる(図2)。まず、「特別扱い」に対する価値観の相違による疑問やよりよく生きたいという思いや願いから、「特別扱いは、よくないのかな。」という考えていきたい問題をもつ。次に、「特別扱い」に対して、これまでの経験や教材を通して、子どもたち一人一人がそれぞれの価値観を表出する。ここでは、「仲が良ければ仕方がない。」という価値観をもっている子どもに着目する。「特別扱いは、仲が良ければ仕方がない。」という価値観をもっている子どもが、「嫌な気持ちになる人がいるからよくない。」「みんながいるところでは、よくないと思う。」などの他者の価値観と比較・関係付けして、他者の価値観を受容しながら考えていく。そして、様々な考えを基にしながら、「特別扱いは、よくないのかな。」という問題に対する自分なりの考えを見いだそうとする。その結果、「周りの様子や周りの人のことをよく考えることが大事だ。」という自分なりの道徳的価値観をつくり上げていく。さらに、その道徳的価値観を基に、「特別扱いをしてしまいたいと思う気持ちは変わらずにあるけれど、周りの様子や周りの人のことをよく考えて接していきたい。」という、よりよい自分の生き方についての考えを深めていくことにつながると考える。

表2 道徳的価値観への変容の過程

| 道徳的価値観への変容の過程 | 道徳的価値観への変容 | 思考力・判断力・表現力等 | 学びに向かう力、人間性等 |
|---------------|---------------------------------|--------------------------|-------------------------|
| | これまでの経験や教材を通して表出した、もともともっている価値観 | 自分自身の生き方を見つめて考える力 | 自分事として考えようとする態度 |
| | 価値理解、人間理解、他者理解といった道徳的諸価値の理解 | 他者の多様な価値観を受容しながら考える力 | 多様な価値観を基に考えようとする態度 |
| | 再構成した道徳的価値観 | 体験場面での内面と関係付けて類推しながら考える力 | よりよい自分の生き方を目指していこうとする態度 |

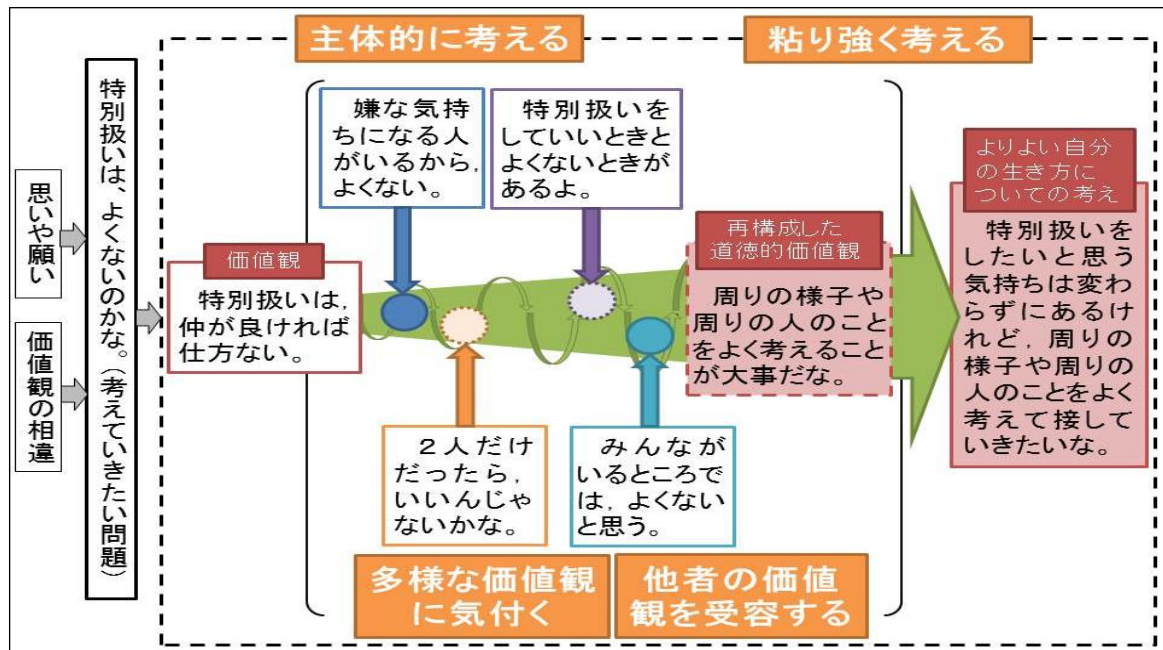


図2 自分を見つめ、よりよい生き方についての考えを深める過程 (例)

このような道徳科授業を具体化するために、本年度は、次の2つを重点にして学習指導を行うことにした。

【重点1】

自分を見つめ、問いをもたせる働きかけの具体化

子どもが、自分を見つめ、問いをもつためには、以下の点を通して考えさせる必要がある。

- 思いや願い
- 知識
- 多様な価値観
- 自分が感じている課題
- これまでの経験と、それに伴う感情

これらを考えながら自分を見つめることによって、疑問や矛盾を抱き、考えていきたい問いをもつことにつながる。そこで、子どもが問いをもつ様相を基に発問を具体化し、設定する。

【重点2】

再構成した道徳的価値観を基に、よりよい自分の生き方についての考えを深めるための働きかけの具体化

再構成した道徳的価値観を基に、よりよい自分の生き方についての考えを深めるために、再構成した道徳的価値観が大切だと感じた理由を交流する活動が必要だと考えた。なぜなら、子どもが、なぜ再構成した道徳的価値観が大切だと考えたのかという理由を交流することで、子ども自身の体験場面での心情や、今後の生活において実践できそうだと感じる場面等を想起させることができるからである。そこで以下のような活動設定を考えた。

- 席を立ち、自由に相手を変えながら話し合う活動
- 再構成した道徳的価値観を色カードに記入し、それを交換しながら話し合う活動
- 少人数グループを作り、再構成した道徳的価値観を発表し合う活動
- 板書された道徳的価値観にそれぞれのネームカードを貼り、それを基に話し合う活動
- 具体的に想起した生活場面をワークシート書き加えていく活動

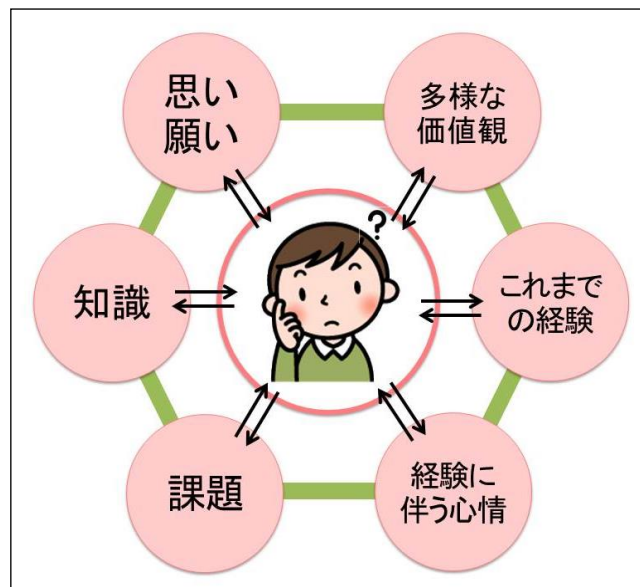


図3 子どもが問いをもつ様相

4. 研究の実際

4.1. 実践の立場

(1) 実践の立場

本実践は、設定した2つの重点「自己を見つめ、問いをもたせるための発問」「再構成した道徳的価値観を基に、よりよい自分の生き方についての考えを深めるための働きかけの設定」が本時のねらいを達成するうえで有効だったのかを検証するために行った。

第2学年

主題名：「よいことなのかな」

内容項目：善悪の判断, 自律, 自由と責任

よいことと悪いこととの区別をしっかりとし、よいと思うことを進んで行うこと

教材名：「みんなのニュースがかり」(学研教育みらい)

(2) ねらい

ア よいことと悪いこととの区別をし、よいと思うことを進んで行うことについて、「よい理由とよくない理由を考える」「相手の気持ちを考える」「自分がすっきりする」などの意義や心構えの大切さについて自分の生き方との関わりを通して理解することができる。【知識・理解】

イ よいことと悪いこととの区別をし、よいと思うことを進んで行うことに関わる見方・考え方・感じ方を他者との関わりの中で、自らの体験場面での内面と重ね合わせて類推しながら考え、表現することができる。【思考力・判断力・表現力等】

ウ よいことと悪いこととの区別をし、よいと思うことを進んで行うことに関わる自分自身の生き方を見つめ、よいと思うことを進んで行おうとする気持ちを高めることができる。

【学びに向かう力・人間性等】

(3) 自分を見つめ、問いをもたせる働きかけの具体化

子どもたちは、日常生活の中で、よいことを進んで行おうとしている。しかし、よいと思うことを進んでしようと思いつつも、自分でよいことと悪いことの区別をつけることが難しいこともある。また、よいことは、「誰かが喜ぶから。」と捉えている子どもが多い一方で、よくないことについては、「守らないといけないから。」といった他律的な理由をもっている子どもが多く、どうしてよくないのかという理由を明確にもてていないと考えた。そこで、よいこととよくないことを区別するには、「なぜよいのか、なぜよくないのか。」という理由を考えることが大切であることを理解させ、よいことと悪いことをしっかり区別していこうとする態度を育てる必要があると考えた。

このことから、子どもが、自分を見つめ、問いをもつには、「よいこととは、どんなことだろう。」「どうしてよくないのだろう。」と自分に問いかけることが必要だと考えた。そこで、子どもがそのような問いをもつために、「けいすけさんは、よいことをしたと言えるかな。」という発問を設定した。

また、その発問によって表出したそれぞれの価値観を比較・関係付けることで生まれる「よいこととよくないことは、分けられるのかな。」という子どもの問いを想定し、「よいこととよくないことは、分けられるだろうか。」という発問を設定した。

発問①「けいすけさんは、よいことをしたと言えるだろうか。」

発問②「よいこととよくないことは、分けられるだろうか。」

(4) 再構成した道徳的価値観を基に、よりよい自分の生き方についての考えを深めるための働きかけの具体化

重点2で示した5つの活動の設定のうち、本実践では、「席を立ち、自由に相手を変えながら話し合う活動」を設定した。この方法は、黒板の前で基にした考えを指で指しながら自分の考えを説明したり、自分の書いたノートを示しながら説明したりするなど、自分が伝えやすい場所で多くの友達と交流することができるため、多くの具体的場面を想起することができる考えた。

例えば、「どうしてよくないのかを考える。」ことを大切にしていきたい子どもは、その理由を、「廊下を走ってはいけないのは、人とぶつかって迷惑をかけるからだ。だから、人の迷惑になることがよくないことだ。」といった具体的な生活場面とつなげて説明する。このように、大切にしていきたいと考えた理由を多くの友達と交流することで、日常生活において、再構成した道徳的価値観を生かせそうな具体的場面が多様に想起され、よりよい自分の生き方についての考えを深めることにつながると考える。そこで、本実践では、以下の活動を設定した。

○ 席を立ち、自由に相手を変えながら話し合う活動

自分の再構成した道徳的価値観を、大切にしていきたいと考えた理由を交流する。

4.2. 第2学年 主題名「よいことなのかな」(善悪の判断, 自律, 自由と責任)における実践と考察

(1) 本時の実際

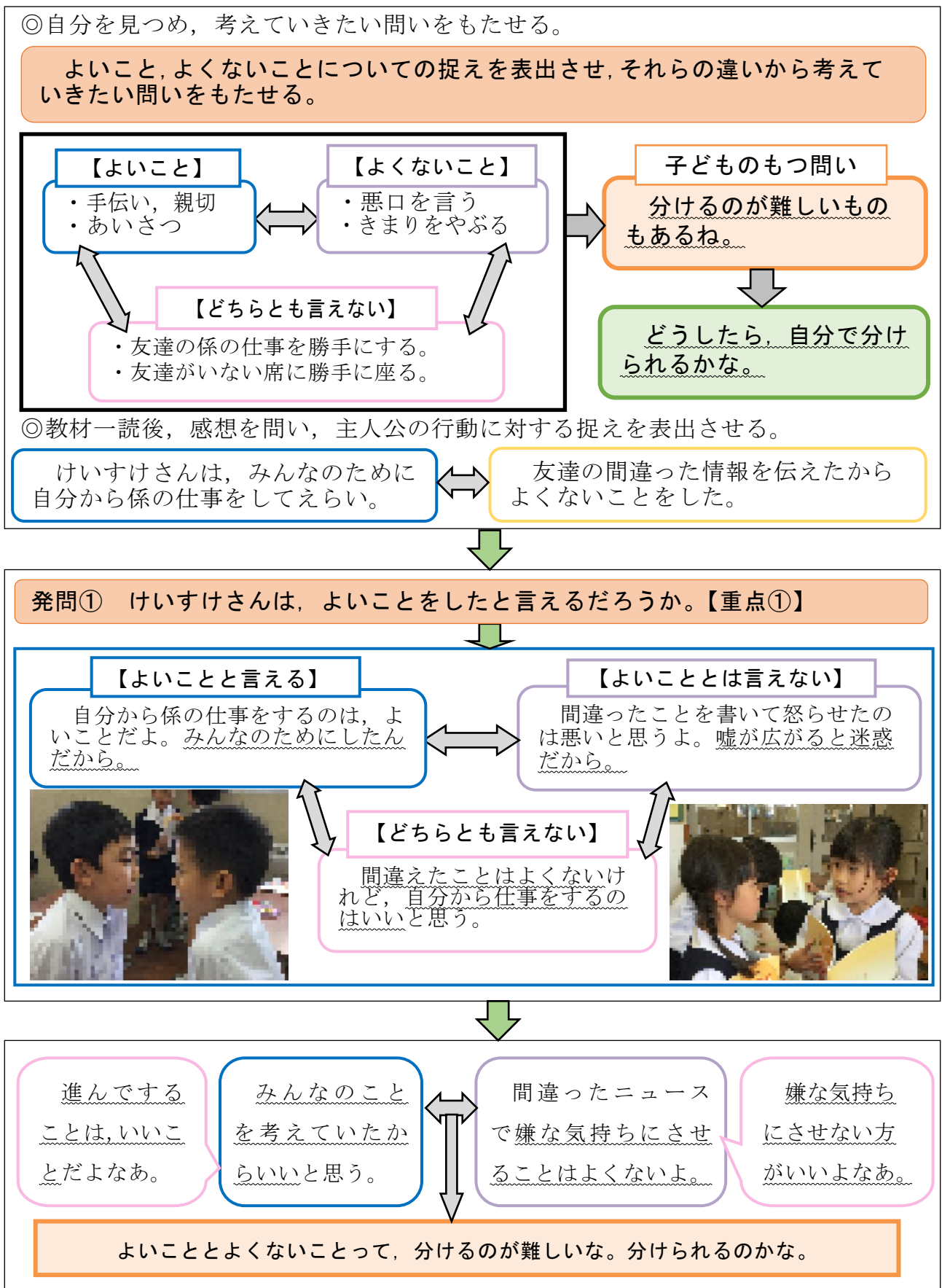




図4 本時の実際①

↓

発問② よいこととよくないことを、分けることができるだろうか。【重点①】



できるよ。よいことは、人が喜ぶことだもん。




人を嫌な気持ちにさせることがよくないことだと分かればできそう。

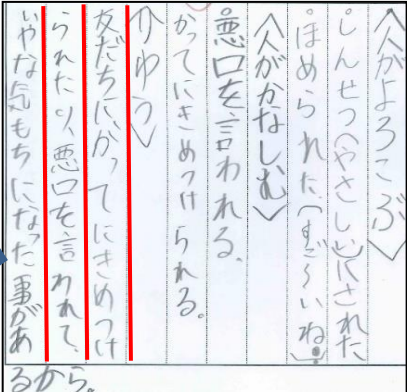
↓

再構成した道徳的価値観
 どうしていけないのかを考えると、よくないことがわかりそうだ。

学んできた中で、自分が大切だと思う考えは何かを理由を基に交流させる。【重点②】




悪口を言ったり、間違っことを勝手に決めつけられたりすることは、その人が嫌な気持ちになるからよくないと思うから、相手の気持ちを考えることが大切だと思う。



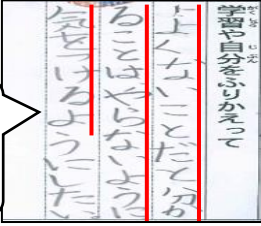
友人がよろこぶこと
 しんせつ(やさし)にされた
 ほめられた(もういね)
 へんがかなしい
 悪口を言われる。
 かけてきめつけられる。
 介ゆつ
 友だちにがってにきめつけ
 うれたり悪口を言われて
 いやな気持ちになった事があるから

僕は、よい、よくないの理由を考えれば自分で区別できると思う。廊下を走るのは、怪我をするからよくないし、スリッパ並べは、次の人がいい気持ちになるからよいよね。



僕は、できた時の気持ちを考えるとよいと思うよ。電車で席を譲ると、相手も自分も嬉しくなるよね。

大切にしたい道徳的価値観の理由を交流した後の振り返りの記述。



学習や自分を大切に
 よいことだて分
 ることはやらないように
 気をけるようにした

図5 本時の実際②

(2) 実践の考察

「けいすけさんはよいことをしたと言えるだろうか。」という発問から、子どもたちが、自分の経験やそれに伴う心情を見つめ、善悪の判断に対するそれぞれの多様な価値観を表出することができた。そして、表出した多様な価値観を比較・関係付けることで、よいこととよくないことを区別する難しさを子どもが共有し「よいこととよくないことを分けることができるだろうか。」という問いを生み出した。さらに、その問いについて考えていくことで、「周りの人の気持ちを考える。」という道徳的価値観を再構成する姿が見られた。さらに、再構成した道徳的価値観の理由を交流する活動を設定したことで、「よいことは人を喜ばせ、よくないことは人を嫌な気持ちにさせることを分かって行動したい。」など、再構成された道徳的価値観を基に、よりよい自分の生き方についての考えを深める姿が見られた。

5. 研究のまとめ

5.1. 研究の成果

- 自分を見つめ、問いをもたせるための働きかけを具体化したことによって、子どもが、これまでの自分の生活をふり返り、よりよく生きたいという思いや願いとの矛盾や疑問などから、「自分はどのように生きるべきか。」という問いをもち、自分事として考えていこうとする姿が見られた。
- 再構成した道徳的価値観を基に、よりよい自分の生き方についての考えを深めるための働きかけを具体化したことにより、子どもが、自分が大切にしたい考えについてその理由を明らかにすることができ、自分の生活とのつなげて考えることで、よりよい自分の生き方についての考えを深めようとする姿が見られた。

5.2. 研究の課題

- 子どもたちがより主体的に、よりよい自分の生き方についての考えを深めていくことができるように、学習指導過程や指導方法の工夫について、さらに研究を深めていく必要がある。

付記

本報告は、鹿児島大学教育学部附属小学校令和元年度研究紀要で発表した研究内容等に基づき、その研究成果をまとめたものである。

参考文献

- 青木孝頼（編）（1980）. 新道徳教育事典 第一法規出版
- 假屋園昭彦・馬場智也・小峯三朗・京田憲子（2014）. 教師と児童とが対話をとおして道徳的価値を発見する授業デザインの開発（Ⅱ），鹿児島大学教育学部研究紀要（教育科学編），第 65 巻，87-123.
- 文部科学省（2008）. 小学校学習指導要領解説 道徳編 東洋館出版社
- 文部科学省（2018）. 小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編 廣済堂あかつき